

職場構内の中庭の草地で、春から初夏へと季節が移るころ、芝の間にひときわ鮮やかな紫色の小花が目にとまりました。ニワゼキショウ（庭石菖、学名 *Sisyrinchium rosulatum*）です。草丈わずか十数センチほど、花の直径も1センチ前後という極めて小さな植物ですが、その姿には驚くほど精巧な美しさがあります。

北米原産のアヤメ科ニワゼキショウ属の帰化植物で、日本では明治時代以降に広がり、今では校庭や芝地、道端など、ごく身近な場所に普通に見られる存在となりました。細い葉は芝草に紛れるほど控えめですが、晴れた日の午前中、花茎の先に開く六枚の花被片は、まるで小さなアヤメか星形の宝石のようです。

淡い紫色の花弁には繊細な筋が入り、中心部の鮮やかな黄色との対比が実に印象的で、近づいて見るほどその造形の美しさに引き込まれます。一つ一つは小さくとも、群れて咲くことで草地の中に確かな存在感を放ち、「小さいが美しく、目立つ」という言葉がまさにふさわしい花です。

花は一日花で、朝に開き夕方にはしぼむため、こうした姿に出会えるのは限られた時間だけです。何気ない職場の中庭も、足元に目を向ければ、このような精巧な自然の意匠が息づいています。普段は通り過ぎてしまう草地の中にも、しゃがみ込んで初めて気づく小さな宇宙があり、庭石菖はその代表のような存在です。都市の片隅に咲くこの可憐な花は、日常の風景の中に潜む自然の美しさを静かに教えてくれます。

(2026年5月中旬／文京区お茶の水女子大学構内)

